

記憶と親密圏

中筋由紀子

地域社会システム講座

Memory and Intimacy of Modern Family

Yukiko NAKASUJI

Department of Regional and Social Systems, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

0：親密圏をめぐる記憶と死という課題

本論考は、現代社会における死のあり方が、親密圏の成立と深く関わる形で成立しているその構造について、理論的に検討しようとするものである。親密圏の構造と死の文化をめぐる社会的な意味連関を明らかにすることで、現代における死の拒絶や隠蔽、あるいは遺族の孤立や悲歎の問題化などの具体的な諸現象についても、新しい視角から捉え直すことができると考えられる。この考察においては「記憶」という言葉をキーワードとして用いる。従来の「記憶」をめぐる議論は、集合的な、あるいは公共的な記憶について行われたものであった。ここでは、私的な親密圏と記憶の関係について考察していきたいと考えている。そこで、親密圏をめぐる死と記憶という問題について描かれている、漫画家萩尾望都の『A-A』というSF作品を取り上げてみたい。

この作品には、事故死後、クローン体で再生された少女アデラドが、周囲の人間との関係で引き起こす問題が描かれる。クローン体のアデラドは、彼女が惑星開発プロジェクトに配属される3年前までの記憶を注入されている。従って、小グループであるプロジェクトのメンバーと3年間の共同生活をした体験は、彼女にはない。グループのメンバーは、彼女とかつて持っていた親しい関係が失われていることにとまどうが、特にかつて彼女の恋人だった男性レグは、自分との記憶を一切持たない彼女を受け入れられず、事故死したアデラドの遺体を見つけたことをきっかけに、プロジェクトを出て行ってしまふ。その後、プロジェクトに、レグが事故死したという知らせが届く。アデラドはレグが出て行ったときも、事故死の報せにも無反応に見えたが、数日後、仲間は彼女が拒食症に陥っていることに気づく。一見無表情なアデラドが、実はレグや周囲との関係に悩んでいたことに気づいた仲間は、彼女と初対面の相手として再び親しくなることを試みはじめる。

なぜ恋人だったレグだけは、初対面の相手としてア

デラドと関わるができなかったのだろうか。彼は最初、クローンの彼女を拒否する。「3年前のアディだって!? 同じ目、同じ髪… (中略)、だけどそれだけで、コピーなら百人だって作れる」。それでも暫くすると彼は、クローンのアデラドと新しく関わろうと試みる。「考えたんだ。きょうはだめでもあしたには愛せるかもしれない。そうしたらまたその時から思い出をつくってあげよう」。しかしアデラドの遺体を発見したことで、彼は「形をまねて」いるだけのクローンは「彼のアデラド」ではないと悟り、他の星への転属を願い出て、クローンのアデラドの前から姿を消す。

しかし考えてみると、もし恋愛というもの、個性と個性の出会いであるとするならば、クローンの少女も個性としては同じ人間である。他の仲間がアデラドの発病をきっかけに彼女を理解し直すのに対して、なぜ特に恋人だった男性だけは彼女を受け入れられないのだろうか。この作品では、それを妨げているのは、恋人との思い出であると描かれる。例えば最後の場面では、他の星で事故死したレグがクローンとして再生され、プロジェクトに帰ってくる。アデラドはクローンの彼と初めてであったとき「あなただけに語りた物語がある」と思うのである。「彼のアデラド」との思い出を持たないレグとなら、新しく出会うことができると、そこでは示唆されている。

わたし達はこの作品をもとに、次のように親密圏と記憶について考えてみたい。すなわち、先のレグの「思い出をつくっていく」という言葉が示すように、わたし達の親密圏は一方で、共有された記憶によって支えられている。しかしその記憶は、共有が何らかの形で損なわれたと感じられるときに、親密な関係を築き直すことを阻害する。それは記憶がその時その場での新たな出会いを妨げるからである。わたし達は本論考で、記憶と親密圏が有する、相矛盾するこの二つの関係について考察してみたいと思う。まず以下でわたし達は、これまでの親密圏をめぐる議論を整理し、わたし達が親密圏をどう捉えるかについて考察しようと思

う。

1：親密圏の置かれた二つの文脈——①残された最後の共同体

親密圏とは何か。親密圏は、家族という言葉に代わり、人々にとっての第一次的な社会領域を指すものとして、社会学に比較的新しく導入された言葉である。わたし達はまずこれまでの諸議論の中で、この言葉が異なった二つの文脈で用いられてきたことを明らかにしてゆきたいと思う。(ただし以下の考察は、あくまで後に親密圏の構造を、現代社会の死の文化と関連づけて考察するために必要と考えられる予備的な作業であり、多くの議論は実際は、二つの文脈の混在、あるいはそれらの重なり合ったどこかに位置づけられるものと考えられる。)

まず第一に、親密圏とは、全般的に都市化された社会において、最後に残された共同性の領域であるという文脈で用いられてきた。例えば、T. パーソンズは、次のようにこのことを描いている。パーソンズは、アメリカの核家族が被ってきた変化を、「巨視的」次元から見た「機能の喪失」と捉えた。これは近代化の過程で、村落や親族などの地縁や血縁によって担われてきた、政治、経済、教育、保護などの諸機能が、次第に市場サービスや学校、政府などの公的セクターに吸収され、人々はこれらに家族員の役割としてではなく「個人として」参加するようになってきている様子を指す。パーソンズによれば、高度に分化したアメリカのような社会においては、家族の基本的な機能は、社会のための機能（巨視的な機能）ではなく、「パーソナリティのための機能」として解すべきである。それは具体的には次の二つ、すなわち、「子どもが真に自分の生まれついた社会のメンバーとなれるよう行われる基礎的な社会化」と「成人のパーソナリティの安定化」である。そしてまたパーソンズは、この二つの機能に関連して次のように述べている。

「子どもの社会化と並ぶ家族の基本的機能の第二は、家族の男女成人メンバーのパーソナリティの均衡調整に関するものである。この機能が婚姻関係のそのものに集中していることはいうまでもない。この点から見て我々の社会における核家族の孤立ということのとくに重大な面は、核家族が自分たちのメンバーと他のものとの間に、地位上の明らかな差別を、ここでもまた強調しているということである。(中略) 夫にしても妻にしても自分が『支援を求めてよりかかって』いってよい相手は (中略) おとなの身内には自分の妻または夫以外だれもいないのである」

(Parsons & Bales. 1956, p39-40)

すなわち、パーソンズによれば、現代社会における

核家族の孤立、換言すれば、親密圏とその外部の社会関係の質的な相違（支援を求めてよりかかってよいかどうか）は、家族がその本来的な機能、すなわちパーソナリティの為の機能を充たすための必然的な条件として生じた事態なのである。

戦後日本社会の家族においても、近代化・現代化に伴う家族の縮小、愛情の重視という過程が見いだされてきた。例えば見田宗介は、近代化に伴う「家郷」の解体が、「核家族」を成立させた経緯を次のように述べた。

「一九六〇年代の日本は、第一次共同体の根こそぎの解体の上に、都市に流入する幾百万幾千万の家郷喪失者（ハイマートロス）の群れの不安と孤独とを推力として、高度近代化を一気に成就する。家郷とは、第一に人間の生の物質的な拠り所(生活の共同体)であり、第二にその生の精神的な拠り所(愛情の共同体)である。第一次の家郷喪失者の群れが新しく都市のさなかで、存在を賭しても獲得しなければならなかったのは、この二重の「根拠」であった。近代の市民社会の古典形式はこの二重の要請を、＜核家族／市場経済＞システムという絶妙の形式を以て充たす。近代核家族とは、極小化された愛情共同体、＜限界の愛情共同体＞である」 (見田, 2006, p116)

すなわち、親密圏とは、これが解体してしまえば、人々はアトム化された個人として、社会の中に砂粒をばらまいたように存在するしかないような最後の絆である。全般的に都市化された社会に生きるわたし達は、そこにのみ確かに愛情や支援を期待できるのであるとされるのである。このことはかつて柳田国男が「孤立貧」という言葉で、近代化の中での貧困のあり方を形容した議論にさかのぼることもできよう^①。

ただしここで家族の基本的な機能とは何か、それは残されたものか、新しく成立あるいは顕在化したものかについては多様な議論がある。またそれを倫理的に規範化、あるいは人々の間で理念化されるようになった愛情、情緒性の重視と捉える場合でも、その内容については多様なとらえ方がされている。そうした議論は、ペットとの関係を家族関係に含めるかどうかをめぐる議論に見いだせるだろう。例えば山田昌弘は、ペットを家族の一員であるとする人々について研究する中で、家族を「代わりのきかない関係、長期的に信頼できる関係、絆」と捉え、人々はその自分の「かけがえのなさ」と「自分らしさ」を求めていると述べる。山田においては、ペットはこうした機能を満たす存在として、家族の一員と位置づけられているのである。

この文脈に基づく議論において共通に想定されているのは、家族の外部の領域においては、他者との関係は一時的なものであるのに対し、家族とは唯一残され

た、長期にわたって持続的な関係である、という点である。ただし現在の家族は、かつての共同体のような包摂性、包括性を持っているとは言えない。かつての共同体は、人がそこに生まれその一員として死ぬまでの一生を包摂するものであり、かつまた、成員にとって必要なものはすべて共同体を経由して充たされるという、機能的な意味でも包括的なものであった。現在、わたし達は家族の中に生まれ、家族の中で死ぬ。(いずれも具体的な場は病院に取って代わられたとも言えるが)とはいえ、その二つの家族には連続性が必ずしも想定できないばかりか、生まれた家族と婚姻によって築いた家族はしばしば異なったものと捉えられるようになってきている。とはいえ、山田昌弘によれば、それでも家族は近代社会において、友人やその他の関係とは異なる「選択不可能、解消に困難が伴う関係」として位置づけられているとされる(山田2005, p 30)。それは、「自分らしさ」「かけがえのなさ」を基礎づける関係として、そうした関係が「信頼」できるものでなくてはならない、という、パーソナルのいうパーソナリティシステムの要請に基づくものであるとも考えられる。

2：親密圏の置かれた二つの文脈——②プライバシー領域としての親密圏

以上に対して、親密圏は、もう一つの文脈、すなわち私的領域、という含意で語られることがある。このときその外側には、公的領域、あるいは匿名性の領域が想定されており、私的領域はその外部社会における自由や自己決定を行う個人の存立基盤として位置づけられている。A. ギデンズは次のように述べている。

「親密な関係性は、公的領域における民主制と完全に共存できるかたちでの、対人関係の領域の掛け値無し
の民主化という意味合いをとものあうのである」

(Giddens, 1992, p14)

ギデンズは、このような親密圏の関係性のあり方を「純粋な関係性」と呼び、かつてのロマンティック・ラブのように、「永遠」で「唯一無二」な相手と「自己投影的同一化」するような愛情を理想とするのとは異なって、対等な相手と自由な選択のもとに「一つに融け合う愛情」を持つことであると述べる。彼はこのような関係性の領域について、近代化の過程で公的領域から排除された女性が、それまで認知されてこなかった新しい活動の場としてこれを築き上げたこと、そこでは、「気持ちの通じ合いと自己開発の媒体として愛情を形づくっていくことが課題となった」ことを述べている(Giddens, 1992, p262-263)。またギデンズはこのような「個人生活の民主化」という意味合いを持った「純粋な関係性」は、個々人の自由なコミッ

トメントを基礎とするために、一方でいつでも解消される可能性を持っており、そのことが親密圏の「構造的矛盾」となっていると述べる。

「『関係を常に取り決めて、折り合いをつけて暮らしていくのには、うんざりすることも時々あります。自分の努力の成果を最終的に手に入れることができるような、そうした安定した状態に一体たどり着けるのか疑わしくなるのです。あなたがゴールを走り抜けても相手は、もっと若い女性を(中略)選んであなたを捨てていく可能性だってまだあるからです』」

(Giddens, 1992, p204)

すなわちギデンズによれば、「純粋な関係性」は、「相手に対するコミットメントを中心に展開する」が、同時に「一方の思うままに関係を終わらすことができる」という特徴も備えている。そこで、無条件でコミットしてゆくものは、その関係が解消された場合、「将来きわめて大きな精神的打撃というリスクを冒すことになる」のである。しかしながらこのような不確かさは、親密圏における相互の存在・意味の承認を、自由な主体が自発的に与えあうというあり方を確かなものとするために構造的にはらまれる、やむを得ないリスクなのである⁽²⁾。

日本では、こうした文脈の系譜は例えば、田中義久の「私生活主義批判」のように、社会のプライバシーゾーンを問題視する議論にさかのぼることができよう。これは戦後日本において、戦中の滅私奉公的な価値観への反動から、私生活に価値をおく当時の社会風潮について批判したものである。田中によればその特徴の第一は、何もしてくれない政治への不信に基づく個人の「生活防衛」であり、第二は、マイ・ホーム主義である。ただし田中によれば、人々は家族を生き甲斐としながらも、その中核の価値観は確立されておらず、人々はその多様さに不安を抱いているという。そこから田中は私生活主義の第三の特徴として、国民的目標の不在を指摘する。戦後、人々は消費社会によって支えられた私生活を「人間らしい自己を回復」する場として生き甲斐としたが、その裏面には、政治や職業生活での役割の矮小化・非人間化と、巨大化・複雑化した機械や機構への物神崇拝があると述べた。田中は、戦後日本の家族が、自律的な人格にもとづいた主体的な自由を阻害する私生活主義に侵されていることを批判したのである。

以上のような、田中の戦後日本の私生活のあり方への批判は、本来私生活が、民主主義の基礎となるような自律的な主体を創出し、また支える場であるべきだという考え方を前提とする。同様に現在では齋藤純一が、社会に抗するための主体の私的領域として親密圏を議論している。

齋藤は、親密圏を、「具体的な他者の生への配慮／関心をメディアとする、ある程度持続する関係性」と定義した。「具体的な他者」とは、齋藤によれば、「一般的な他者とは異なって人称性を帯びた他者」であり、「『他ならぬ』という代替不可能性を幾分か含んでいる」存在である。そしてそのような他者との配慮／関心に基づく親密圏は、「生の歓びや生の意味」に関わるものであり、「孤独」とはその不在である。したがって、たとえ家族や家庭の中に生きながらも「親密な他者」をもたない、すなわち親密圏を持たない事態もあり得ると述べるのである。

このような齋藤の定義は、「最後の共同体」としての①の定義と近いものであると一見、見えるかもしれない。しかし、それを問題とする文脈は異なっている。齋藤が「親密圏」を問題とするのは、それが、「社会的なもの」との関係における「安全性の空間」として捉えられているからである。

「親密圏は、単なる事後的なセーフティネット（中略）ではなく、また、単に日々の生存への不安を緩和し、癒しを与える緩衝装置でもない。それは、ひとが社会的な評価に過剰に曝されることを防ぎ、引き続き有用であり得るか否かといった評価から少なくとも部分的に効力を奪う。親密圏の他者は、社会的な承認と異なった承認を、社会的な否認に抗しながら、人々の生に与えることができる」（齋藤、2003、p222）

また齋藤は、セクシャリティの問題を事例にした議論においても、「プライバシーの自由」を、社会的な規範の圧力に抗することのできる場、それによって既存の自己アイデンティティを書き換えることを可能にする場、「自己への自由」を確立することを可能にする場と述べている。齋藤はこの文脈で、セルフヘルプグループを、親密圏の事例に含めて捉えているのである。したがって、この文脈においては親密圏とは、そこでこそ、あるいはそこでのみ、互いのかげがえのない価値、意味が承認される場である、とされているのである。

ところで、このような文脈において捉えられる親密圏とは、どのような共通の社会的な意味連関において成り立っているのだろうか。それぞれの論者による親密圏の定義ではなく、議論の文脈に着目して考えるならば、それは次のように言えるだろう。すなわち、それは、手段と目的、という視点からの社会領域の分割である。詳しく述べるならば、親密圏とその外部という二つの領域への社会の分割は、そこにおける社会関係が、その個人にとって手段的なものか、それ自体を目的とするものであるか、という視点から行われている点で共通していると考えられるのである。

親密圏の外部の社会、公共圏あるいは市場圏は、必

要を満たすための手段であり、わたし達はそこでは他者を手段として利用する。一方、親密圏における関わりは、何らかの手段として利用されるものではなく、それ自体が目的である、とされる。こうした対比は、市場交換と贈与との対比を比喩としても捉えることができるだろう。すなわち、市場交換においては、目的は交換の対価であり、交換を行うための他者との関係は手段に過ぎない。一方贈与は、一見見返りを期待することなく物やサービスが贈られるが、このとき物やサービスは単なる手段であり、目的とは贈与される他者との関係の成立・持続、あるいは意味付与であると考えられる。

言い換えれば、わたし達が親密圏という私的領域を、わたし達の人生の目的や価値としているということは、外部社会における行為はすべて他者を手段として利用するものであり、そうした手段的な行為が最終的に価値や意味を保証されるのは、親密圏においてである、ということなのである。ただしその承認は、「残された最後の共同体」としての親密圏が、長期持続する関係性においてアイデンティティの一貫性を保証するのと異なり、外部社会の行為の手段性に対する、親密圏の関係の目的性において、今ここにおける主体自体の意味や価値を、相互に承認するものなのである。

3：親密圏を支える共有された記憶

以上でわたし達は、親密圏をめぐる議論が、分析的に見るならば二つの異なった文脈においてなされてきたことを考察した。以下では、この二つがどのように親密圏の構造として関わり合っているのかをさらに考えてみたい。

まず、最初の文脈、「残された最後の共同体」としての「親密圏」は、関係の長期的な持続を共通のロジックとしていた。パーソンズによれば、パーソナリティシステムのための機能を果たすよう、もはや外部社会には期待できない支援を求めうる場であったし、また山田によれば、人々が「自分らしさ」「かけがえのなさ」を承認されるための、「代わりのきかない関係、長期的に信頼できる関係、絆」であった。換言すれば、「最後の共同体」としての「親密圏」は、時間的な持続性において、アイデンティティの一貫性を支えているということである。

わたしがわたしである、というアイデンティティの多くの部分は、記憶に基づいて形づくられている。例えば多くの小説は、記憶喪失を、アイデンティティの喪失として多彩に描いてきた。（例えば映画「トータルリコール」では、シュワルツネッガー演じる主人公は、ある日、自分がねつ造された過去によって別人格として人生を生きてきたことに気づく。）自分の衣服や食べ物好み、自分のやり方、気質や人との交流の仕方、すべて記憶に基づいて「自分らしい」もので

あると判断される。そうしたものが失われている、と自覚された場合、自分が今していること、今感じることが、かつての自分と同様か否か、「自分らしい」ものなのかもはや判断できない。それは、アイデンティティが社会的に構成されるものであることによる。今現在のわたしの服装や振る舞い、嗜好や表情も、過去との一貫性の中に位置づけられている。従って、記憶を失ってしまった場合、わたしが今している外見や振る舞いが、果たしてかつての知人が見てわたしだと分かってくれるものであるかどうか、もはやわたしには分からない。かつてのわたしは何らかの周囲との関係の中で、無理して明るく、あるいはおとなしく振る舞っていたのかもしれない。そうした周囲の人々から引きはがされたなら、わたしは全然別の表情、振る舞いをしているのかもしれない。

アルヴァックスは、公共的な記憶を論じるに当たって多く日本で引用されてきたが、その議論には多く、親密圏をめぐるものが含まれている。アルヴァックスは、個人的な思考や、個人的な思い出と思われるものが、実は集合的なものであること、わたし達は必ずそうした思考や体験を、何らかの集団の一員として体験しているのであると述べた。

「我々の思い出は集合的なものであって、たとえそれが、われわれだけが関与した出来事や、われわれだけが見た事物にかかわるものであっても、他の人々によって想起こされるのである。というのは、実際にはわれわれは決して孤立しているのではないからである。われわれと異なっている他の人々が形をなしてそこにいる必要はない。というのはわれわれはいつもわれわれと共に、またわれわれの中に、多くの人々の記憶を持っており、(中略)私が独りで歩いているのは外見だけなのである。(中略)というのも私は考えにひたりながら、あれやこれやの集団に身を置いていたからである。」(Halbwachs, 1950, p 2-4)

わたし達の記憶は、わたし達が身を置く集団の中に共有されている。記憶の共有は、私の記憶の証人となってくれるばかりでなく、わたし達のその集団へのコミットメントを強化する。従って「自分の生命の一期間を忘れるということは、その時期われわれの囲りにいた人々とのつながりを失うことである」(Halbwachs, 1950, p13)。また逆に、わたし達が有る集団を離れ、彼らとの関係を失うことは、わたしの記憶を不確かにするだろう。ある集団が外部との関連を持たず持続することがない場合、「そうした記憶の持続は、事態の成り行きからいって、集団が持続する期間に限られている」(Halbwachs, 1950, p10)。アルヴァックスはリセの先生が卒業生を忘れてしまった例を挙げている。先生にとって、クラスという社会集団

は「本質的に束の間の存在にすぎない」ため、先生は生徒を忘れてしまう。これに対して生徒は、卒業生同士の交流を続けていた場合、その集団の内部でクラスの思い出が共感を生み出すものとして繰り返し言及されることで、記憶が維持される。アルヴァックスによれば、思い出は想起の中で集合的に再構成されるのである。

「この再構成は、われわれの心の中だけでなく他の人々の心にも存在する共通の所与や観念を出発点として、なされなければならない。なぜならそれらの所与や観念は、われわれの心から他人の心へ、またその反対へと絶えず繰り返して動いていくのであるが、それが可能となるのは、それらが同一社会の部分となっており、しかもずっと続けて同じ社会に属しているからである」(Halbwachs, 1950, p16-17)

わたしが私であるという記憶が一貫してわたしに成立するためには、わたしの記憶を共有する共同体としての親密圏が持続している必要がある。したがって、親密圏が長期に持続する関係であることは、そこにおいてのみ、わたしが私であるという記憶を一貫して想起し維持することができるはずの場だからこそ、必要なことなのである。わたしが人生の過程でどのような集団に加わり、また離れ、それによってわたしの記憶のどのような部分が新たになり、また失われようと、わたしが一貫してわたしである、という記憶における同一性は、親密圏の持続によって保証されている。親密圏におけるわたしの記憶は、わたしの部分的な記憶などではなく、またそのほとんどでもなく、より根本的な場を構成するもの、わたしというアイデンティティの成立する場、わたしの諸々の記憶が位置づけられる地平を構成するのである。換言すれば、親密な他者を失うことは、わたしの一部を失う以上のこと、わたしが私自身であるという保証を失うことである。

4：親密圏を支えるコンサマトリーな出会い

以上で、わたし達は、「残された最後の共同体」としての親密圏が、わたしの記憶を保持し、わたしをわたし自身として成立させる地平を構成していることを見た。次にわたし達はこれに関連づけてもう一つの文脈、すなわち、「プライバシー領域」としての親密圏について考察しておくことにする。

わたし達は既に2節で、私的領域としての親密圏が、わたし達にとって目的という含意を持つことを見た。すなわち、わたし達は、親密な他者といるときには、一緒にいること自体が価値であり目的なのであって、そうした関係が、別の何かを達成するための手段であったり、別の目的のために利用されたりすることは決してない、ということである。わたし達は親密な

他者にとっては、互いに自分自身であることにおいて承認されているのであり、何かの有用性のため、あるいは特別に優れた点を持っているから、または何か利益をもたらすから一緒にいるのではない。それこそが親密圏をプライバシー領域として閉ざす理由である。親密圏の外部の領域では、すべて何らかの目的のための手段として、他者と関係を結ぶのであり、わたし達はその関係を利用すると同時に、他者によって利用されている。そこでは互いの手段としての有用性、他に優れた性質を持つことなどが、比較されて選択される。一方、親密圏は、そこでの関係を何かの手段として他と比較し判断する基準を排除する場であり、その点で外部社会から自らを隔離しているのである。親密圏の関係は、見田宗介の言葉を借りるならば、「インストゥルメンタル（手段的）な」外部社会に対して、「コンサマトリー（即時充足的）な」ものであるといえるだろう⁽³⁾。すなわち、コンサマトリーな出会いの場として親密圏がいつも確保されているからこそ、わたし達はわたし達の存在そのものの価値や人生の意味を、そこでいつでも確かめうると感じていられるのである。

ところで、コンサマトリーであるという親密圏の第二の性質は、長期的な持続という第一の性質と矛盾する側面を持つ。手段性を排除する、ということは、時間を排除することでもある。見田宗介がコンサマトリーな関係性の例としてあげるのは、第二次大戦後、死刑宣告をされたB・C戦犯の手記である。

「南方で死刑の判決を受けたB・C級戦犯の手記などを見ると、収容所を引き出されて判決の場所に向かう途上ではまったく目に入らなかった道や小川が、判決の帰途にはかぎりなく美しく、なつかしいものとして見えてくるという手記にしばしばぶつかる。不可避のものとしての死への認識が、いったんは意味論的な回路を獲得した精神の、『未来』への意味の疎外を突然に遮断するので、現在のかげがえのなかへと逆流した意味の感覚が、世界を輝きで充たすのだ」

(真木1977, p124-125)

コンサマトリーな関係性とは、今ここにあることのかげがえのなさの感覚において、わたし達の目的、価値そのものとなっているのである。現代社会においては、このような関係性は、親密圏においてこそ得られるものとされており、言い換えれば、そうした関係を追求することは親密圏のうちに囲い込まれているのである。

むしろ現実には、わたし達の親密圏における関係にも、様々な将来の計画や目的があるし、わたし達が親密な他者という時間の多くも、そうした将来の価値や目的のために手段として行われる活動に多く費やされ

ている。そのこと自体は（むろん時間的な配分の問題はあるが）必ずしも親密な他者との関係を疎外するものではない。しかし、親密な他者という時間が、外部の何かの価値や目的のために利用されることは、親密圏のコンサマトリーな関係を阻害する。わたし達は親密な他者が、自分たちという時間や手間を節約しようとしたり、他の目的のために利用していたと感じるならば（例えば会社の出世のために家族の団らの時間を上司の接待に用いるような）、ひどく傷つくのではないだろうか。それは親しい関係を損なったというばかりでなく、そこで確認されるはずだったわたしの価値や意味をも（たまたもし他に親密な関係を有していない場合には、それを行った本人の価値や意味をも）危うくするのではないだろうか。

ところでわたし達はまた、コンサマトリーな出会いが、親密圏のみに成り立つと考えているわけではない。先のB・C級戦犯の事例も、親密圏とは異なる場での、コンサマトリーな事物との出会いを描いたものである。ただしわたし達は親密圏には確かにわたし達の意味や価値を確認できるコンサマトリーな出会いが期待できると考えるのであり、他の関係ではそれは偶然的な僥倖であると感じるはずなのである。

5：当初の課題に戻って：親密圏をめぐる死と記憶

以上でわたし達は、親密圏における社会関係が、共有された記憶によって支えられているのと、コンサマトリーな出会いによって支えられているのとの、二つの側面を有することを見てきた。最後にわたし達は、もう一度冒頭の課題に戻って、この二つの側面の関係について考察し、なぜレグはクローン体のアダラドを受け入れることができなかつたのかについて答えてみたいと思う。それは、親密な他者との記憶は、なぜその時その場での出会いを妨げるのであるか、という問題でもある。

わたし達はその理由を、現代社会においては、親密圏に、わたし達のアイデンティティを支える共有された記憶と、わたし達の価値や意味を支えるコンサマトリーな出会いの場と、両方が囲い込まれているからであると考え。集合的な記憶自体、またコンサマトリーな出会い自体は、決して親密圏にのみ成り立つものではない。しかしわたし達は現代社会において、わたし達のアイデンティティを支える場として、この二つのことを共に親密圏において確かに期待できると考えている。しかしながら、親しい他者との記憶を持ち歩くこと、すなわち見かけ上は独りでありながら、いつもある親密圏に帰属する存在として自らを位置づけていることは、可能性としてではなく現実のコンサマトリーな出会いを阻害する。

アルヴァックスは、わたし達が常に社会的存在として、すなわち何らかの集団の一員として考え、体験す

るということを、次のように述べている。

「彼が独りだったのは外見上だけのことでしかない。というのは、このわずかの時間においてさえ、彼の考えも行動も、彼が社会的存在であるという特質によって説明されるからであり、彼は一瞬たりとも何らかの社会のうちにあることを中断してはいないからである」
(Halbwachs, 1950=1989, p20)

親密圏の記憶が特にわたし達のアイデンティティにとって根本的である、ということは、わたし達は意識しているにしろいないにしろ、常に根本の所では、親密圏の一員として、考え体験しているということである。独りであろうと、別の集団にしようとして、わたし達はどこかで常に、親密圏の意味連関の中で物事を考え、体験を捉え直しているはずなのである。誰にも理解されない心の部分を持つとすることは、親密圏の関係を阻害する。わたし達はいつでも潜在的にせよ、親密圏の記憶を持ち歩いているのである。言い換えれば、今ここでの他者や事物との出会いは、将来の目的や計画によってばかりでなく、親密圏の一員として自らを位置づけていることによって阻害されるのであり、その効果として、わたし達は実際にも親密圏以外の場において、コンサマトリーな出会いを体験することを阻害されているのである。

わたし達は以上のような親密圏の構造が、現代社会における死の隠蔽・拒絶や遺族の孤立などの問題と関わることを次に考察してゆきたいと思うが、それはまた稿を改めて論じることにはしたい。

注

(1) 「孤立貧」については、柳田国男『明治大正史世相篇』を

参照。

- (2) 現代社会における親密圏の構造には、それが成立する社会によって若干の差異が認められる。親密圏の比較社会学的な考察については中筋由紀子『死の文化の比較社会学』を参照。
- (3) 「コンサマトリー／インストゥルメンタル」については、見田宗介独自の用い方として、彼自身が解説をしている、弘文堂の『社会学事典』の同項目を参照。

引用文献

- 萩尾望都, 『A-A』, 小学館, 2003年.
- Halbwachs, M., 1950, *La Mémoire Collective.* = 『集合的記憶』小関藤一郎訳, 行路社, 1989年.
- Giddens, A., 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism.* 『親密性の変容 近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』松尾精文, 松川昭子訳, 而立書房, 1995年.
- 真木悠介, 『気流の鳴る音』, 筑摩書房, 1977年.
- 見田宗介他編, 『社会学事典』, 弘文堂, 1988年.
- 見田宗介, 『社会学入門』, 岩波書店, 2006年.
- 中筋由紀子, 『死の文化の比較社会学』, 梓出版社, 2006年.
- 中筋由紀子, 「死と親密圏」, 『死生学 [3]』, 東京大学出版会, 2008年.
- Parsons, T., & Bales, R.F., 1956, *Family: Socialization and Interaction Process.* = 2001, 『家族』, 橋爪貞雄他訳, 黎明書房, 2001年.
- 齋藤純一編, 『親密圏のポリティクス』, ナカニシヤ出版, 2003年.
- 齋藤純一, 『自由』, 岩波書店, 2005年.
- 田中義久, 1971, 「私生活主義批判」, = 『リーディングス日本の社会学12文化と社会意識』, 見田宗介他編, 東京大学出版会, 1985年.
- 山田昌弘, 『迷走する家族』, 有斐閣, 2005年.
- 山田昌弘, 『家族ペット』, 文藝春秋, 2007年.
- 柳田国男, 1931, = 『明治大正史世相篇』, 筑摩書房, 1993年.

(2008年9月16日受理)